

移行期にある体育

武藤 幸男

Physical Education in Transition

Yukio Muto

Abstract

Physical education is one of the three domains that are intellectual education, moral, education, and physical education. In September 1998, Ministry of Education put forward the proposal that made the transition from health and physical education to the prevailing physical education. According to the proposal we have understood the current physical education and teachers at school have been practicing the physical education. In the present study I offer my viewpoint to the relationship between physical education and sport and the related problems on the based of my field experience in wide range of educational organizations from kindergarten to high school education.

研究の動機

情報学部、広報学科の専門科目として平成10年4月よりカリキュラムの中にスポーツジャーナリズムという科目名が誕生し、それを担当し三年間の試行錯誤の結果、問題点として何か掘めたかという事は、ジャーナリズム関係の総評としては、現在の所、スポーツを中心としての考えからすれば、スポーツジャーナリズムの動きは、ご都合による流れであり、何々学と言われるようなものではないと言えるのではないかと思う。付随するスポーツはジャーナリズム活動の立場から言えば見方によって、基本的な見方や考え方により、まるで意味が違ってしまい、立場としては、よりスポーツを知り（ルール・種類・内容・精神的な面・心理的な面等）よりジャーナリズムの活動をスムーズにする事となるであろう。伝達に関してはより多種目のスポーツを体験して、体育をより深く知ることが必要であると思われ、現代体育としてのスポーツについて研究を進めたく思いはじめた。その先には、移行期と言われている変化を見いだす様な方向に持って行きたいと思う。

序論

まず、「体育」といわれる領域といわれてきたものについては、名称としての存在から検討に入りたいと同時に、「教育」といわれる領域についてもこの際、触れてみることにした。

最近の日本の社会現象としての教育の内容について、体育、徳育、知育の順に並ぶ改善と、充実への要望の強さが、表せる順位と言える状態であり、体育はmentalとphysicalに大きく区分した考えとして、健康教育を絡ませた上での実践であっても、現実としては上記の様な内容であって、他に錯覚的な理解をしてもらえない様に、よりよい訴え方をしなければならない。

即、体育活動を大きく換える事象として、かかわるスポーツについての存在を定義する事によって、問題解決（スポーツに内在するもの）を一昨々年に、文部省（現在の文部科学省これ以下文部省）が外見的な定義や分類を上手にやってのけてくれたといえるこの答申（平成9年9月）が出されたと思いたいが、一段落したところで、内容的に、枠や定義や将来に向けた展開を軽く受けることは出来ない。何故ならば、一般的体育事情としての接点と競技スポーツの複合的な内容については、形式的な区分であり、その接点は互いに曖昧な部分を都合により第三者に理論付けをほのめかしたに過ぎない。そこで、体育的なスポーツの扱いとスポーツとしてのスポーツの扱い、そして結果として鶴呑みに近い状態で、又、流れていくだけということであってはならない。あの答申が出てから2年半以上の期間の変化は、過去50年の体育系のものは、鶴呑みにされ続けられて現在に至る為に、進歩という良い内容の充実があったとは言えない。

これらの実情は、大阪成蹊びわこスポーツ大学のカリキュラムの骨子は今様の形にどこでプレーキがかかった形で発足したと思われるが、それは又々、引きもどした考えといえる。現在の優等生も将来は実社会へのプロセスについては必ずしも良い結果として進むとは予測できまい。予測出来る展開の中では、現時点の変化が3年間という間に考え方や見方が変わるであろう。それは新しいカリキュラム的な考えが単年度で生み出されることは可成り困難な上に一度実施する建前として4年間継続実施することとなると、4年間以上かかる場合もありうると思われる発想と展開がくりかえされる。

その予測は結論的には、有機的、統合的な働きが必ず出て来る用語で、35年位前の教育的な動きの形容に使われた言葉でコンドラチェフの波（経済用語）ごとき予測がある。正に、その予測は50～60年毎に変化が起きているといわれて来たが、この論からすると、ここ数年で色々な面での変化が始まっている。

教育的な面で色々な答申が出され現在の所2003年に大枠で一段落するような判断をしたが、未だ改革も当然予測と断定がある筈であるが、その中に当然組まれることを望みながら論を進めた。

ここから前述したものの具体化を図る為に原点的なところに戻り、基礎的なものと現在のものを行ったり戻ったりの中、新しい物が出て来てはいるが、現実の「体育」の世界である学校教育の中の「体育」は、全体的には指導要領の内容が良くまとまっていると思える。一方、環境やインフラにより一部活動に支障がある条件は、一部取り扱えない場合を除くこととなり、未来の表現や実施が出来ず、「野球ばかりが、うまくなり」であってはならないと思う。そして最近流行のサッカーの真似が傾向としては生まれているのである。理論と現実が可成りかけはなれている新指導要領では、「体育」という内容が見直された。その中で筆者は、現状までの47年間の教育の一端を経験することが出来、大学の入学ころから、将来までの体験希望に対し前に述べてある様な47年の間に予想・願望を達せたといえることは、なお、過去・現在の表現を続けていきたい。

そこで、体育について的一般論で、あの答申がパイロットになれると思ひ、従来の経過を反省し日本版ウエルネスの実施の夢を見ていた。それもフィットネスを4年間実施する予定を建てた時、既に体育不足を補う為のスポーツとしてのウエルネスの実施を設けていた。蝸牛の角のあい

だ程の研究であっても、その中にウエルネスではなく、ワク作りが可成りしっかりしている様に見えることが出来ると思う。

従来の体育の定義的な活動について何もわかっていない指導者が、形式体操的な真似をして当然の様なことが通用する世界でもありうると思えることが常識かの様な実情を多々見たり聞いたりした。当然となれば何が原因であるか考えるに、体育そのものが先にも述べた様に見かけでなく「体育」の本質的な解釈と離隔の上の本気のたわごとであれば良いのではないかと思っている。

各論

「体育」の本質

道徳的、知的、身体的それに社会性とを基盤とした人間性の形成等の目的に向う内容の充実と高揚は、体育と言われる文化の高揚でもある。

1930年頃の考えからダイナミズムと云われる語句は第2次大戦の後の体育志向と思想的な背景をもたせた。これらは岸野の解くところである。

上記の様な体育論の形は一つのパターンといえるであろう。これ以前の体育概念は岸野・今村の「新修体育大辞典」にまとめられたドイツの影響を受けた物であり、これらの他に「スポーツ大辞典」等があるが、近年(1997年)の保健体育審議会の答申である「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」の「心身の健康の保持増進のための」段落は「体育」を置き換えたものと考えられる。

さて、この答申によれば、これからの学校教育の在り方については「生きる力」の育成を基本とし従来の概念規定から離れての様な表現をしているが、根本的には大差のないもので、むしろ具体的な項目建てをすることなく発表した将来に備えての対処とも思える。

具体性に欠ける項目を立てずに論を構築したとも思える「生きる力」は、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむとしているが、これらは1930年頃の論理と何ら変わることがなく、ただ漠然とさせた様にしか受け取れない。正に自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、主体的に行動し、よりよく問題を解決する資質や能力とし、自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心などの、豊かな人間性であるとしているが、見方によっては、はやりのITの論理だての様にも思える。こうなると「体育」という語句の出る幕はない。これが1996年7月に出された中央教育審議会第一次答申では、増々当然とも云える移行期を示唆する。移行期の二期にあたる平成14年のところは後述する。移行する体育→「生きる力」そして次に来るのはどの様な学校教育の変換かが予測できそうである。

答申の内容の中には大学が入っていない学校教育などあってはならないし、考え方によっては、現代的ではないものといえるのではないか。見かけはいつでも対応できる様な様相をみせている文で、実のところは、答がという教育を推し進めていく体育的活動が教育活動と同時に理論体系を示すべきで、もし現在の様に特にこれといったものがないとするならば、それなりに方針なり目的を示した上での処置を取って欲しいものである。

スポーツの意義

スポーツとは哲学がない「領域」と先ず書き出し、従来の「きそう」「たのしむ」「うごく」という囲いがあったが、この度の答申では、はっきりと健康という言葉が入って来ている。これらは専門研究者としては簡単には表せない熟語である。このことは筆者としては体育史専攻の立場からするとスポーツ即健康ということは出来なかった。現に今度の答申の中に競技スポーツといわれる「領域」が出来たことが、これらを裏付けることの出来る用語であり、学校体育の中のスポーツの中に位置づけられている。これは「スポーツ＝健康」といえない場合が予測出来ることは、体育史専攻者としては、いえないのではないかと、及び、それは、多くの競技者がスポーツによって健康を害しているといえる状況で、まだまだスポーツ科学の発達とスポーツ医学の立ち後れが否めない。この様な現場でようやく「スポーツ＝健康」といえると思われる。そして、この考え方はアメリカの活動の中の「ウェルネス」と同類の考えといえよう。しかし内容の考察をしてみるとフィットネスの段階をふまえての考え方でなければならないと思う。これらの論は後述する部分でも、もう少し付随する問題にふれてみる。

「世界の人々との相互の理解や認識を一層深めるなど国際的な友好と親善のためにも有意義である。」という文言があるが、スポーツの分類の上では「格技」を「武道」にしたのは、従来の種目の分類について1930年頃から学んだ者とするれば、「格技」は4領域の一角でレスリング・柔道等をまとめて分類して来た。分類については定義はなく、いくつかの方法があったが、上記の趣旨からすれば、武道にしなくとも、又、国際的観点からすれば一考の余地があると思う。

次に、性質・内容のスポーツと言うようなことはなく生涯スポーツと言う言葉が適当と思われるが、次のようなライフステージ分類は、大変好感的持てるように思う。

ライフステージ	
区分	おおむねの年齢層
乳幼児期	～6歳ごろ : 幼稚園
児童期	～12歳ごろ : 小学校
青年期前期	～18歳ごろ : 中学校・高等学校
青年期後期	～25歳ごろ : 高等教育段階・就職
壮年期	～30歳代ごろ : 就労
中年期	～60歳代ごろ : 就労・退職
老年期前期	60歳代ごろ以降
老年期後期	75歳代ごろ以降

1997年の保健体育審議会答申

スポーツについては、それぞれの側面を考えると複雑多岐にわたり、特定の定義をするということが現在では不可能である。だが物的心的な対応を理解し実際の程度融合混和の分析的実践的なものを外面的にしかとらえられない時を経て来たが、サッカーのワールドシリーズやパンパシフィック水泳大会を観るに、実施～打ち上げ迄を総括してみると内容の中には、可成りの成果を上げた運営者・選手その中でもスポーツに携わったものの進歩が目立った。それらは現に云わ

れている競技スポーツの実戦者達が理想に近づいている姿をとらえることが出来たと思える大会であった。

しかし、スポーツに絡んでの問題として、中途半端な活動は人間を駄目にしている現状をどの様にとらえているか、教育配慮からすれば無駄の積み重ねとなるといわざるを得ない。これらはスポーツ科学や生理学的や心理的なバックアップが少ないのと、その指導者の研究不足があげられる。と同時に、そのものの学識のなさがあげらると思っている。

何はともあれ、「体育」の領域の中にスポーツがあるというよりスポーツがあるから体育が生まれた様な錯覚を起こすほど体育とスポーツの関係は当然切り離すことが出来ない事象である。その一端として高校迄の体育の時間の活動内容はスポーツが90%を占めている現況なのである。「体育」、「スポーツ」は、人間生活にどの様な影響を及ぼすか、ただ単に健康と結びつければ良いということではない。それぞれに検討を加えることによってこれからのそれぞれの時の流れの中に意義をもたせ納得のいく内容として行かなければならないであろう。

いづれにせよ、理論先行の内容であってはならない領域である。この両者については実践がともなう理論の様相になることが好ましいと思う。

「体育」について、より内容理解を深めることはある意味では到達の出来ない存在とも考えられる。しかし体育に含まれていると思っていたスポーツは、別の領域が存在していると考えられないこともない。それは、体育哲学は存在するがスポーツには哲学が存在しないということをは岸野が云っていることから、考え方のうえでは存在しないと否定していることからしても、スポーツは、別としてみることによって、体育の必要というか、もしくは上記の様な考え方をすれば真に哲学の領域で考えて、他の論理を構築すべきであると思う。又、スポーツは、無理に「健康」と結びつける様なものであるとも云えるのではないか。健康について説明することで後述するスポーツジャーナリズムの中で触れてみたい。

スポーツジャーナリズムとはスポーツとジャーナリズムという用語の結語で出来たととりあえず理解してみようと思った。それは何かジャーナリズムという言葉がフリープレスの考え方をすると、大きなかたまりで、スポーツは一事象でしかないと捉えたので、報道と伝達という点からしても領域の大きさと考えたし、言葉の印象としてもジャーナリズムがあつてスポーツが付随していると思った。

しかしながら、ジャーナリズムについて出来るだけ、意味と内容について、後先とか大小でなくそれぞれの活動の中に於いては、ジャーナリズムもスポーツの関係は、それぞれの立場からそれぞれに考えればよいと思う様になったということが出来る。筆者としてはスポーツ専門家であるので、ジャーナリズムの方はごくごく一般的な理解でしかなかった。

論題に対して近づく前に、筆者としてはスポーツジャーナリズムの中でのジャーナリズムの方が、偏った解釈をスポーツに対して持っていると思える様になった。この様な見方をする様になったのは、図書館やジャーナリズム関係の担当者から集めた資料からみると、「スポーツ紙離れに危機感募る。」(1989/8) 向江の小論文あたりから始められ。「取材体型は未確立であるが新しい息吹も」(1989) 町田の小論文があげられるが、存在感を見せ占めたのは、上記のものより早くだされた1984年の新聞研究特集のザ・スポーツジャーナリズムと云えよう。内容としては、

「テレビのスポーツ番組作り」谷本

「スポーツ雑誌は娯楽の消費物化している。」小椋

- ・多種にわたって多くスポーツが出された為
「総合レジャー紙志向のスポーツ新聞に転機が来た。」大木
- ・一般社会の出来事をのせてみたが、余計なことである。
「コマーシャルイズムとテレビが五輪を変えた」水田
- ・ロサンゼルス大会が良い例である。
「主役は、やはり人間です。」萩原
「変わるスポーツ紙」丸田
- ・ニュースを取り上げ、普通の新聞との比較。
「紙面にみる 揺れるスポーツ観」村田
- ・スポーツ紙の動きに問題あり
「スポーツ業界紙が応えるべき役割はこれだ」坂本
「夢見るころを過ぎて」新聞記者読本（1987）木村
「ポイントを押さえた紙面作り」新聞研究（1988／8） 森田
「スポーツ番組の問題は報道か娯楽かにある」岸田（ザ・スポーツジャーナリズム）
- ・カイヨワ（アメリカの学者）の引用は一外人のスポーツの見方・考え方。
以上のようなまとめたものは過去にも現在にもない世界で、内容は1点のみ中立的論文であったが、あとはスポーツに関しては良い方向でない表現になっていない。
これらを見て、立場としてスポーツの理解が、書いた人々にスポーツらしいスポーツを体験し、その内容も濃く、スポーツに関しては専門家と云える状態で書いて欲しいと望みたい。そして理解内容の分析をして欲しい。今や日本には日本なりの「体育」がある。翻訳本からの表現では今様とは云えないと思う。
となるとスポーツの専門家としての働きかけが出来なければならない訳であるが、既に前述し
てあるように、サッカーワールドシリーズ、パンパシフィック水泳大会の業績として、将来のスポーツジャーナリストの卵と同時に関わった人々の中には、今迄に見られなかった解説や実況の分野で従来にはない新しい人材がでてきたので、今後のスポーツジャーナリズムも大いなる活躍が期待できる傾向が出てきたことはこれも移行期のスポーツと云えよう。
上記の流れは、「体育」「スポーツ」「スポーツジャーナリズム」を主眼として述べたが、これらから、従来の「体育」がそれなりに解ったところでもう一度「体育」を見直すこととした。

本論

「移行期にある体育」について述べてみたい。今迄の各大きな3つの項目については、まだまだ書き尽くすことは出来ず、他の機会にまとめてみようと思っている。それにしてもそれぞれの理解の上で論を進めなければならないが、ある意味で自己満足でしかない程度のものであった様に思う。

移行期の体育とは一体何をさしているのかと云うと、現在、当然の様な時代の流れに乗っている様に思えるのだが、実際には見方・考え方によっては、全く違った「本質的に違った理論」が成立することがわかる。それはスポーツ等を手段とすることでなく、身体教育、健康を考える活動なり運動の必要性を、別の尺度で科学する事でありこの事が次ぎの世代の人間生活の一つのバ

ターンとしてすでに理解されているの様なので、できるだけ無駄の少ない構成としてみる。この様な行動が現実の移行ものと云えるので、高等教育としての領域の中に入れる形も当然違って来るであろう。例えば脂肪の分解は筋肉といわれ、体力についての限定ではなく、平均体力などという用語もなく、将来的には一人一人に必要な処方が出来なければそれらに働きかけることが必要となり、教育で云えば、カタカナ英語や新語は出来るだけ使わない方向で体育は合目的な方向で有機的、統合的にまとめたら良いのではないか。但し、高校迄の体育の現状の中に言不実行や指導するに値のないやからはいらぬか指導の出来る指導者の育成には大いに力を入れてもらいたい。

さて、一方の「スポーツ」に対しては、結論から云えば、スポーツ（高校迄は別）については、現在の文部科学省の云う「競うスポーツ」の為のスポーツを、中途半端でなく出来るだけ時間と内容をより洗練された方法で活動する方向で、高等教育の中ではより専門的に指導と実のあるコーチ活動にどっぷり漬かり、自主トレも充分に取り入れた形で活動することに意義があり、健康についての知識と技能を解っている指導者でなくてはならない。

上記の「体育」「スポーツ」を実施するとなれば現行のカリキュラム式では通用しないのでは、体育専門の学校とは異なって来て、お互いに指導者、選手、その他の別枠で活動する事で、不参加者があっても結構、ただしくりかえすが、中途半端な活動であってはならない動きが絶対で、落伍者に対する指導は多くの場合はスパルタ式で対応すれば結果も出てくる。

この様な手段を執ることによって今までの様な無駄を省くスポーツ活動がスムーズになり実も上げられると確信できる。

この様なスポーツの考えする様な移行に現在遭遇しつつあるわけだが、のろしは上がっていない様に思える。、時間の浪費の授業展開が、あってはならないと云える。

「体育」と「スポーツ」について移行期とは何を目的とするかと問われれば、この両者の歴史や経過や現在を考察してみるとそれぞれの時の流れの様に、はっきりとしたポイントは、そしてシステムは、もっと巾も深さも浅く、せまく、又短い過去であったように思う。

総論

現代の体育が移行期にあるという表現は、97年の文部省（現在の文部科学省：以下文部省）の答申の中の「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」の保健体育審議会の答申、平成9年9月22日に出された綴りの内容についての検討を他のいくつかの答申と共にやって来た。その間に、この答申が出される前に同僚達との研究の中で、従来の実施されていた「体育」の中に、文部省の発表した体育関係やその他のものを検討し、1997年の答申迄で投げ一般的に云われていた体力の不足が謳われてマスコミにも取り上げられた次第であるが、この様な現象は過去にも何度か取り上げられたわけだが、かつてアメリカに於いて第二次世界大戦のころ日本と比べても体力の低さが解ったころ、体育活動という領域では問題にされない経過についての反省として体力づくりの方向で色々と規格され実施し、極端とも思える内容で、やがて国家的な運動というか、政策として取り入れて体力づくりの色々な案が出て来た。それがsports for all を基としてフィットネスの実施、そして、ウエルネスの実施がもたらせる史的経過から見ても身体教育と同時にアメリカの場合は軍国主義とも結び

ついたものであった。やがてその結果として、体力と同時に心理的な働きかけによる効果が出たわけであるが、我が国に於いての体力の問題は現象としては立ち後れていたのは、過去の状態で、当然、ドイツのトリム的な考えに対しても一考しなければならぬ状況下で我々は「日本的なフィットネス」と云われている様な運動を実施する為に担当者と学生の協力により自己満足ではない活動方法を組み立てることが出来た。実施内容は移行期の体育のはしりの様な指導を暗示した訳ではなかったが、4年間のサイクルでのカリキュラムで考えているが、第2年目の後には既に移行期を意図して次ぎのカリキュラムの方を考えてウエルネスの方向で改変と思ったところ、スポーツジャーナリズムの講義を併せてみるとその方向と実施内容をこの論述した「移行期の体育」という論点に到達した。

スポーツジャーナリズムの筆者としてのダメージは、大変大きな物であり、とくに体育の中の主流とも云えるスポーツの関係者にとっては、この文明と文化の発展した社会の中で活動しているのがおかしいのではないか。

内容について今回は紹介出来なかったのが残念ではあるが中途での一部紹介はしたつもりで、いずれにせよ「体育」も「スポーツ」も中心になる言葉についてはそれに打ち立てが出来ていて、ある意味で入り込んでいく所がない様に思える様な方向で実践と理論があまりにもかけ離れて実施される光景は、そろそろ大鉦を振るうべきではないという状況で、正に教育関係の文部省の政策は逆戻りの事象で色々な教育的指導行為については何をかいわんやで、5日制の考え、補習の件、先生の研修の活動内容、その他教育の問題は山積されている。

少々余計な論述をしたが、これらも固定概念による悪習から生まれるものであり、さかのぼれば教育理念の転換をしなければ、時間つぶしでしかない。これらの事は、「体育」にもいえると思われるので、新しい内容と実践をともなった活動を展開して欲しいものだ。

結論

体育事象の移行とは現在の体育の概念ではグローバルな存在になっていないし、バイオメカニクスの基本的なものを根底と、内容としては小・中・高は従来の指導要領に従った展開であり、大学に於いては体育哲学と体育心理、バイオメカニクス（生理学的）なより高度な内容まで高め、スポーツについては、中途半端な事は自己の考え方を重要な扱いでなくてはならない。（サークル等の活動をし、理論は必修、実技はスポーツとして徹底的に行う、為には指導できるコーチと云われる内容もより高い技術に届いた人間がやることである。）

両者の実施については、従来の考え方でなく「徹底」ということを実践させ、又、するという方向で、これらが教育課程の場に置き換えることは、従前のものよりスッキリと学び得ることである。

参考資料

文部科学省

生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について答申 1998

門奈直樹

ジャーナリズムの現在 日本評論社 1993

井之上 喬

パブリックリレーション PHP 2000

田村紀雄

ジャーナリズムを学ぶ人のために 世界思想社 1993

原 寿雄

ジャーナリズムの思想 岩波新書 1997

新聞研究

抜粋15号 新聞研究 1990代

小野三嗣

運動・レクリエーションの健康学 大修館書店 1985

久保 健

「からだ」を生きる 創文企画 2001

体育理論

体育理論 八千代出版 1993

杉山茂樹

サッカーだけじゃつままない 凸版印刷 2000

宮下充正

21世紀の体育・スポーツ 杏林書院 1982

読売新聞社会科学部

体と心 いまの時代はこう守る 読売新聞社 1992

村本詔司訳

からだのスピリチュアリティ 春秋社 1994

松本伸夫

ジャーナリストの論理 白水社 1997

総合ジャーナリズム研究

総合ジャーナリズム研究 東京社 1990